

『ワトソン』と『つぶやき』

はぎわら
萩原

ふみたか
文隆

●電機連合・中央執行委員（総合研究企画室長 兼 教育部長）

早いもので、2回目の寄稿となります。前回の『労働調査』発行後、諸先輩方からご連絡をいただき、うれしいやら、さらに責任の重さを感じたりやら、あらためて発行物による影響の大きさを認識しました。

さて、そういうことで、「温故知新」。今回は、これまで、この「NEW WAVE」にどのような話題が書かれているか読み直しをさせていただきました。「AI（人工知能）」とか、「IoT」とか、最新の話題が多いですね。でも、門外漢のわたしが、このようなテーマで書いても致し方なし。ということで、「AI」といえば「ワトソン」、「ワトソン」といえば「シャーロック・ホームズ」（英国人作家コナン・ドイルの代表作である推理小説シリーズ）の主人公である探偵の相棒である医師の名前が「ワトソン」ということが浮かびました（AIとの関係はよくわかりませんが）。

最近、この「シャーロック・ホームズ」（スパインアウト作品も含め）が映像化されると、登場人物のキャラクター設定の性別や性格などを大きく変えているものもあります。娯楽性や話題性もあるでしょう、また、内容に、これまでにない「意外性」や原作が書かれた当時の時代背景の変化による「限界」、「常識」を超えた「膨らみ」などを与えることができるでしょう。もしかして、これも「多様性」を受け入れることによる積極的な変化なのでしょう。

このように、海外ドラマでは、人種、国籍、宗教あるいはLGBTなど、多様な人物が登場するもの多くあります。それが登場人物の「多

様性」だけが話題になるのではなく、あくまでも「青春ドラマ」、「社会派ドラマ」としてフレームが練り上げられているので、そのドラマのストーリー性に惹きつけるものとなっています。そこで、さすが「人種のるつぼ」といわれる米国、と思ってしまうのですが。かつては「豊かな生活」の象徴であった米国のテレビドラマは、私たちに埋め込まれた「米国は進んだ理想的な社会」の体現者であったはずですが。そして、今では「多様性」を受け入れる姿を映し出していると思っています。もちろん、それは過去においても、一面的な見方であったのでしょうか。

しかし、その思いとあらはらに、最近、マスコミを通じて伝えられる米国の姿は、社会の分断と格差の是認が、これまでになく表面化してきているような気がします。そして、それを煽るように権力者によるメディア攻撃、そして最高権力者が「ツイッター」という手段で発する「つぶやき」の内容は、あまり「品の良い」言葉での発信ではないように感じられます。米国には、多様性を認め合い、それぞれの文化が互いに混じり合って「るつぼ」の中で溶け合っていて、一つの独特な共通文化を形成している社会であって欲しいですね（それが、思い込みの理想であっても）。

そうしないと、いろいろな意味で影響を受ける日本も寛容性がない社会になりつつあるような、そんな懸念を払拭するためにも。

また今回も、回りくどい文章になりました。諸先輩方、叱咤激励のご連絡をお待ちしています。